

〔実践記録〕

特区における小学校英語活動の長期的効果の研究

植 松 茂 男

要 旨

本編では、小学校英語活動を特区として既に導入している大阪府寝屋川市内で、それがどのように中学生の英語スキルと情意面に影響を及ぼしているのかを4年間継続調査する科研費研究の3年目の中間報告をする。

語彙・文法、リーディング、リスニングからなる英語力指標テストとインタビューテストを併用して英語力を測定するとともに、23項目からなる情意アンケートも併せて実施し、小学校英語活動の長期的効果の検証を試みている。つまり、小学校英語活動の開始学年や履修時間が変われば英語力や情意にどのような影響を及ぼすのかを、中学1年生、2年生、3年生の各学年で毎年調べることによって知ろうとする研究である。最終年度の2010年度調査（2011年3月）を目前にして、これまでの流れと発見をまとめてみた。

2009年度終了時（2010年3月）に得られたデータを2007年、2008年分と比較分析した結果、小学校英語活動開始学年が下がり、履修時間が増えるにつれて、中学1年生では全ての英語力指標テストの結果が向上していることがわかった。また、中学2年生のみで実施しているスピーキングテストに於いては、そのスコアが毎年統計的に有意に向上している。一方、情意面では履修時間にかかわる統計的な差は検出できなかった。

1. 本研究の趣旨とその手法

1.1 はじめに（研究の趣旨）

大阪府寝屋川市は、2004年に内閣府構造改革特別区域「小中英語教育特区」の指定を受け、2005年度から2007年度の3年間の「英語特区」指定期間にあわせて「国際コミュニケーション科」を市内全ての小中学校でスタートした。2005年度は小学校5、6年で、週1回ずつ年間35時間、中学校で通常の英語授業（週3回）に加えて週1回ずつ年間35時間実施。2006年度からは小学校1年生からの実施に踏み切った。実施時間数は低学年（1、2年）で年間10時間、中学年（3、4年）では年間20時間である。寝屋川市では、国際化時代を生き抜く「国際コミュニケーション力を備えた」子どもの育成を、「情報教育」とともに大きな教育目標に掲げ、英語を通して「発信型コミュニケーション力」の育成を目指すことを「国際コミュニケーション科」の目標としている。

筆者はこの「国際コミュニケーション科」（実質的には英語活動）の小学校低学年からの導入が、どのような影響を中学生の英語学習に与えるかを、英語スキル面・情意面の双方から観察してみようと考えた。

調査にあたっては寝屋川市内の公立中学校を一枚選び、そこで定点観測を実施させてもらった。寝屋川市は「特区」の終了後、2008年度からは「教育課程特例校制度」を利用し、「英語特区」時期とほぼ同じ体制で英語教育を継続している。

1.2 寝屋川市の英語教育運営体制について

・カリキュラム：

寝屋川市では「コミュニケーション力と情報活用能力を身につけたこども」をつくり出すために、文部科学省の英語教育研究開発校の市立第十中学校（2003-2005年）に於ける成果をもとに2005年からの英語教育特区の取り組みを開始し、市内全小・中学校で英語教育活動を「国際コミュニケーション科」の名のもとに推進した。それぞれの学年に応じた、寝屋川市独自のカリキュラムが考案され、その中では小中一貫カリキュラムが重要視された。特筆すべき内容としては、コミュニケーション・情報活用、英語、国際理解に関する素地を育てるために、「言葉と体験の学習」を重要視したことである。

・運営組織：

市教委、校長会、教頭会などが中心となった「英語教育推進委員会」が各種行事・研修などの企画、運営を行い、12中学校区の小中学校が連携を図り、小学校の英語担当教員（英担）が中学校の英語教員（国際コミュニケーション科担当）と「連絡会議」により連携を図っている。さらに民間から各小学校に「英語教育支援者」を採用。英担と担任を現場で補助している。また各中学校に英語母語話者教員が1名ずつ配置され、授業の傍ら毎月5回程度、該当中学校区の2小学校を訪問している。

・教員採用・研修・教育施策：

教員研修に関して、特筆すべきものとしてカナダの姉妹都市オークビル市のシェリダンカレッジに、特区指定期間中の3年間に計36名の教員を夏期短期研修に約3週間派遣した。内訳は各年度、4中学校区から中学教員4名、小学教員8名、計12名である。また特区指定期間以降、現在に至るまで以下の研修も実施されている。

- (1) 英語教育支援者（JAT：Japanese Assistant Teacher）の民間からの採用及び研修
- (2) 外国人英語講師（NET¹：Native English Teacher）の採用及び研修
- (3) 小中学校英語担当者の定期的な会議及び小中引き継ぎのための連絡会議の実施
- (4) 地区小学校間でシラバス、教材の共有と中学校との連携
- (5) 英語教育支援者、英語担当教員（英担）による授業内容・指導方法の共同開発
- (6) 小中の交流行事（教員・児童生徒）
- (7) 児童英検・英検の実施（全市受験）のための受験料補助
- (8) ブロック別「英語特区研究発表会」の実施（2007年度、2009年度）
- (9) ITC教育機材の積極的導入・リアルタイムネットワークの構築

1.3 研究手法について

1.3.1 英語力指標テスト

英語スキルを測る英語力指標テストの選定に当たっては次の4点を重視して選んだ。(1) 1 授業時間内 (50 分以内) で実施できるもの。(2) 統計的に標準化されたテストであること。(3) 日本の中学校の英語教科書・教材の内容に準拠したテスト内容であること。例えば TOEIC Bridge 等は不可。(4) 実施単価があまり高価でないもの。

以上の条件を満たす種々の英語力指標テストを調べた結果、ELPA 社 (Association for English Language Proficiency Assessment: 英語運用能力評価協会) の JACE (Junior High School Assessment of Basic English) テスト (Level 1: 中 1 修了レベル~Level 3: 中 3 修了レベル) が一番上記の条件に近い採用した。このテストは「項目応答理論」(Item Response Theory) に従って作成された標準化テストで、内容は語彙・文法 (22 問、100 点満点)、リーディング (10 問、100 点満点)、リスニング (18 問、100 点満点)、計 300 点満点を 45 分で解く問題である。ELPA 社によると、各テストの信頼性評価 (reliability estimate) は、クロンバック α^2 値でそれぞれ、Level 1 (中 1) = .81、Level 2 (中 2) = .81、Level 3 (中 3) = .86 である。費用は生徒 1 名あたり 300 円で、実施校の 1 年生から 3 年生までのほぼ全員 ($n=600-700$) が受験する。

1.3.2 インタビューテスト

JACE テストに含まれないスピーキング力を測るため、簡単な英語の「会話」(conversation) テストと、渡した絵をもとに自分でストーリーを考え、英語で自由に語る「ストーリー・テリング」(story-telling) テストの二部からなるインタビューテストを実施した。問題作成にあたっては、英検 3 級の 2 次テストの問題・評価シートを参考にした。実施時間は 2 つあわせて 1 名約 7 分程度である。インタビューテストの実施、及び採点に際しては、研究分担者及び N 中学校の先生の協力も頼み、3 名体制で実施した。インタビューテスト実施には時間がかかるため、受験を間近に控えた 3 年生や行事がある 1 年生は不可能であることが判明した。その結果、JACE テスト結果が平均的なクラスを 2 年生から 1 クラス選んで実施することとした。人数は、毎年約 35 名である。

1.3.3 情意アンケート及び英語に関する質問

情意アンケートは、過去のアティチュード (情意)、モチベーション (動機) 研究の文献・アンケートを参考に作成した 60 項目を、パイロットテストで主成分分析し、23 項目のコンパクトなものにした。これはホームルーム (10-15 分) 等を使って短時間で実施できるようにという学校側からの要望に配慮したためである。

さらに英語学習経験に関する質問 (渡航歴、英会話教室の経験など) も 7 項目加え、合計

で30項目となった。回答に要する時間は約15分である。情意アンケート項目については全て「1: 全くそう思わない 2: そう思わない 3: どちらとも言えない 4: そう思う 5: 強くそう思う」の5択でマークシートに回答してもらった。

1.4 実施時期・形態について

2007年度から2010年度の研究終了年まで、寝屋川市立N中学校の1年生から3年生まで約700名を対象に、調査は毎年学年末同時期、3月上旬に実施した。内容は、各学年とも上記JACEテスト、アンケートである。インタビューテストに関してのみ、上述のように毎年2年生から1クラスを選び学年末に実施した。

1.5 本研究の目的とユニークな点

小学校英語が、中学校以降の英語学習にもたらすスキル・情意面双方の長期的効果に関する研究報告はこれまである程度存在したが、そのほとんどが私学一貫校・国立大学付属校等の非公立校を対象にしている点で、「一般化可能性」(generalizability)が低いと考えられる。本研究では、公立小学校における英語教育の効果の検証を、校区の公立中学校で定点観測し、導入学年次と学習時間数による差が、中学校英語教育にどのような影響を及ぼすか検証しようとするものである。ゆえに1点目として、これまでよくみられた、「小英経験者」と「小英未経験者」のおおざっぱな比較にとどまらず、開始年次、総履修時間数による違い、また英語力と情意との相関等、より詳細で具体的な知見が得られると考えている。

2点目として、これまで情意アンケートの結果は「順序尺度」(ordinal scale)(例: 5: 強く同意する、4: 同意する、3: どちらとも言えない、2: 同意しない、1: 全く同意しない)による回答を便宜上、「間隔尺度」(interval scale)と見なし、スキルテスト結果(間隔尺度)との相関を調べるのが主流であった。本研究では、アンケート結果を「ラッシュ分析法」(Rasch Analysis)³⁾を使い標準化した上で、「質問項目信頼性」(item reliability)、及び「回答者信頼性」(student reliability)、「天井効果」(ceiling effect)⁴⁾などをチェックしながら統計処理を行った。こうした心理統計学的(psychometric)な手法を用いた点でユニークな取り組みである。

3点目に、インタビューテスト結果も、3人のインタビュアーが付けた5段階のスコアを「多相ラッシュ分析法」(Multi-Facet Rasch Analysis)を用いて標準化し、上記の各種信頼性をチェックしたのち、3人の評価者の観点別評価基準の「厳しさの度合い」(rater severity)も補正した上で、統計処理を行った。

2. 概要：各年度取り組みについて

2.1 2007 年度の研究のありかた

研究開始初年度の N 中学校生の学年ごとの小学校英語活動（国際コミュニケーション）の履修時間数は、中 3（未実施、ただし NET の訪問あり）、中 2（35 時間：小 6 のみ週 1 時間）、中 1（70 時間：小 5、小 6 週 1 時間）であった。各テスト・アンケートの実施が学年度末の 2008 年 3 月のため、2007 年度はデータの経年比較はできず、第 1 回目のテスト・アンケート及びインタビューをスムーズに行えるように、実施中学校との関係の構築や、校区小学校も含めたカリキュラム、支援体制、授業内容の把握に力を注いだ。

具体的には以下の通りである。

1) 寝屋川市立 N 中学校で 1 年生 220 名、2 年生 197 名、3 年生 229 名の計 647 名を対象に、リスニング、リーディング、語彙・文法に関するテスト（JACE テスト）を学年末の 2008 年 3 月に実施した。

2) 情意面や、出身小学校等の情報を調べるアンケート（計 30 問）を JACE テストと同じく、2008 年 3 月にホームルームの時間を使って実施した。

3) 1、2 年生 1 クラス（計 70 名）対象にスピーキングテストを 2008 年 3 月に実施した。

4) N 中学校、校区小学校 A 小、B 小の英語担当者と交流を開始し、さまざまな情報を得られる関係の構築に努力した。

5) 寝屋川市の英語教育支援者（JAT）選考会議や英語母語話者教員（NET：ALT）派遣会社選考会議に委員として協力し、どのようなプロセスで英語支援者選考がなされるのか体験した。

6) 早期英語教育の比較検討材料として、台湾の小学校英語教育を視察した。台湾国立教育大学の張教授の紹介で、台北市の「文化国民小学校」等にて小学校 1 年生から 6 年生までの英語授業を見学。台湾では早期英語の加熱が「社会格差」の拡がりや、児童の「英語嫌い」に繋がり、小学校に於ける担任と英語教員との「棲み分け」が進むなど、問題点が沢山存在することを知った。詳細な内容は植松（2008）に成果報告した。

7) 上記 7) の内容について、報告講演を実施した。

8) 寝屋川市特区 3 周年記念英語特区研究発表会に授業観察・助言等の協力をした。

2.2 2007 年度研究：小学校英語活動を「受けていない」学校との比較結果と分析

2007 年度には上記に加えて「小学校英語活動を受けていない」近畿圏内別市の中学 1（35 名）、2 年生（35 名）の計 70 名に対しても、同時期の JACE テスト・アンケート・インタビュー実施の協力が得られた。この大都市近郊の中学校（B 中と以下表記）の保護者の社会経済的なバックグラウンドは、教員のききとりからほぼ寝屋川 N 中と同程度と考えられる。

ただし、双方を客観的に比較できるデータ（共通学力テスト等）は入手できなかった。小学校英語活動は行われていない B 中区域の小学校では、年数回の「国際理解活動」（地域の外国人と料理を作る）がメインの行事として行われ、コミュニティに住む外国人をゲストとして招いている。しかし、非英語圏出身者がほとんどであるため、日本語でのやりとりが主である。

筆者が B 中を訪問して管理職に本研究の目的と意義を説明したところ、以下の条件付きで協力を申し出てくれた。(1) 府県名、都市名、学校名、協力者名を出さないこと、(2) 1、2 年生それぞれ 1 クラスのみを対象とすること、(3) 協力者はこれらのクラスを担当する英語教員 1 名のみで、英語科にはこの話は伝えない。

この B 中との英語力テスト (JACE)・インタビュー結果の比較は以下の各表にまとめている (表 1~8)。

2.2.1 英語力テスト (JACE)・インタビューテスト結果の比較

中 1 では JACE テストのリスニングスコアの比較に於いて寝屋川 N 中が統計的に近い差で B 中を上回り (表 1)、またスピーキングテスト (インタビュー) では、会話、ストーリー・テリングの双方で統計的に有意に上回った (表 2)。リスニング、スピーキングの双方で

表 1. JACE テスト結果の比較 (中 1)

| | 語彙・文法 | リーディング | リスニング | 合計 |
|------------|-------|--------|-------|--------|
| N 中平均 | 59.20 | 60.57 | 60.86 | 180.69 |
| 標準偏差 | 12.11 | 21.14 | 9.21 | 36.58 |
| B 中平均 | 54.40 | 57.71 | 56.40 | 168.51 |
| 標準偏差 | 13.24 | 19.42 | 11.25 | 40.15 |
| <i>t</i> 値 | 1.58 | .59 | 1.81 | 1.33 |
| <i>p</i> 値 | .12 | .56 | .07 | .19 |

Note. *p*-value (2-tailed).

表 2. インタビューテスト結果の比較 (中 1)

| | 会話 | ストーリー・テリング |
|------------|-------|------------|
| N 中平均 | 11.21 | 10.59 |
| 標準偏差 | 2.78 | 2.60 |
| B 中平均 | 8.92 | 8.88 |
| 標準偏差 | 3.14 | 2.58 |
| <i>t</i> 値 | 3.23 | 2.77 |
| <i>p</i> 値 | .00 | .01 |

Note. *p*-value (2-tailed).

表 3. JACE テスト結果の比較 (中 2)

| | 語彙・文法 | リーディング | リスニング | 合計 |
|------------|-------|--------|-------|--------|
| N 中平均 | 53.82 | 54.71 | 53.35 | 161.88 |
| 標準偏差 | 16.57 | 24.28 | 15.57 | 51.23 |
| B 中平均 | 48.06 | 53.61 | 43.69 | 145.36 |
| 標準偏差 | 11.85 | 19.44 | 16.35 | 40.84 |
| <i>t</i> 値 | 1.67 | .21 | 2.53 | 1.49 |
| <i>p</i> 値 | .10 | .84 | .01 | .14 |

Note. *p*-value (2-tailed).

表 4. インタビューテスト結果の比較 (中 2)

| | Conversation | Story-telling |
|------------|--------------|---------------|
| N 中平均 | 11.56 | 8.75 |
| 標準偏差 | 2.60 | 3.03 |
| B 中平均 | 9.56 | 6.63 |
| 標準偏差 | 2.19 | 2.61 |
| <i>t</i> 値 | 3.48 | 3.14 |
| <i>p</i> 値 | .00 | .00 |

Note., *p*-value (2-tailed).

有意差が検出されたことから、寝屋川市の「コミュニケーション能力の育成」を主眼においた小学校英語活動の長期的効果が、中学校 1 年生の時点であらわれていると解釈できる。

中 2 では JACE テストのリスニングに於いて、寝屋川 N 中が B 中をリスニングにおいて統計的有意に上回った (表 3)。またスピーキングテスト (インタビュー) でも会話、ストーリー・テリングの双方で統計的有意に上回った (表 4)。リスニング、スピーキングの双方で有意差が検出されたことから、寝屋川市の小学校英語活動の長期的効果が中学校 1 年生同様、中学校 2 年生の時点でも残っていると解釈できる。

2.2.2 情意アンケートの結果

情意面を測るアンケートは結果を分散分析 (ANOVA) した。中 1、中 2 とも 21 項目の情意アンケート項目を、F1:「国際コミュニケーションに対する考え方 (7 項目)」、F2:「英語学習に対する考え方 (5 項目)」、F3:「自他に対する敬意 (5 項目)」、F4:「英語を学習する理由 (4 項目)」4 つの因子に分けて調べた⁵⁾ (各因子内の質問項目の詳細については 3.4 参照)。結果は表 5 から表 8 に示してあるが、統計的有意差は一切検出できなかった。

上記 2.2 の研究は、2008 年度以降の N 中比較データが揃うまでの間に 2007 年度データを利用して行った副次的な調査であり、N 中という定点での比較をする本体研究とは異なり、

表 5. 情意アンケート結果 F1:「国際コミュニケーションに対する考え方」

| | <i>SS</i> | <i>df</i> | <i>MS</i> | <i>F</i> | <i>p</i> |
|----------------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|
| Between Groups | 111.86 | 3 | 37.27 | .89 | .45 |
| Within Groups | 5724.96 | 136 | 42.09 | | |
| Total | 5836.82 | 139 | | | |

Note. *SS*=Sum of Squares, *df*=degree of freedom, *MS*=Mean Square.

表 6. 情意アンケート結果 F2:「英語学習に対する考え方」

| | <i>SS</i> | <i>df</i> | <i>MS</i> | <i>F</i> | <i>p</i> |
|----------------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|
| Between Groups | 132.31 | 3 | 44.10 | 2.13 | .10 |
| Within Groups | 2821.09 | 136 | 20.74 | | |
| Total | 2953.40 | 139 | | | |

Note. *SS*=Sum of Squares, *df*=degree of freedom, *MS*=Mean Square.

表 7. 情意アンケート結果 F3:「自他に対する敬意」

| | <i>SS</i> | <i>df</i> | <i>MS</i> | <i>F</i> | <i>p</i> |
|----------------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|
| Between Groups | 70.90 | 3 | 23.64 | 1.36 | .26 |
| Within Groups | 2364.89 | 136 | 17.39 | | |
| Total | 2435.79 | 139 | | | |

Note. *SS*=Sum of Squares, *df*=degree of freedom, *MS*=Mean Square.

表 8. 情意アンケート結果 F4:「英語を学習する理由」

| | <i>SS</i> | <i>df</i> | <i>MS</i> | <i>F</i> | <i>p</i> |
|----------------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|
| Between Groups | 16.98 | 3 | 5.66 | .59 | .62 |
| Within Groups | 1296.01 | 136 | 9.53 | | |
| Total | 1312.99 | 139 | | | |

Note. *SS*=Sum of Squares, *df*=degree of freedom, *MS*=Mean Square.

母集団は近いものを選んだと言っても「違う」ものであることは念頭に置いておかねばならない。これらの結果は、参考情報として2008年7月の小学校英語教育学会（JES）、及び2008年9月の日本リメディアル教育学会（JADE）にてその概要を発表した。また、その詳細は英文でもダイジェスト版（Uematsu, 2009）及び完全版（Uematsu, 2010）でそれぞれ成果報告した。

2.3 2008年度の研究のありかた

2008年度のN中生の小学校英語学習総時間数は、中3（35時間）、中2（70時間）、中1（70時間）である。70時間が2年続くのは小学校低学年への導入が2005年のスタートの翌2006年に開始されたことに起因する。従って2009年度は中3（70時間）、中2（70時間）、

中 1（90 時間：小 4 開始、年間 20 時間プラス）、2010 年度は中 3（70 時間）、中 2（90 時間、年間 20 時間プラス）、中 1（110 時間：小 3 開始、年間 40 時間プラス）と段階的に総履修時間が増加する。

2008 年度の研究実施状況に関しては以下の通りである。実施時期・方法に関しては、初年度と同じく各学年の履修内容がほぼ完了する 3 学期末に実施した。

1) N 中学校で 1 年生 210 名、2 年生 214 名、3 年生 203 名の計 627 名を対象に、リスニング、リーディング、語彙・文法に関するテスト（JACE テスト）を 2009 年 3 月に実施した。

2) 同時に、出身小学校の情報を新たに加えた情意面を調べるアンケート（計 31 問：出身小学校を問う質問を 1 項目加えて、計 31 項目になった）を 2009 年 3 月に実施した。

3) スピーキングに関しては、インタビューテストを N 中学校 2 年生 1 クラス（35 名）のみを対象に 2009 年 3 月に実施した。

4) N 中学校の授業観察、及び校区 A 小学校、B 小学校の授業参観、三校の担当者打合せ等に数回参加し、小中連携の問題点等を聞かせてもらった。

5) N 中学校、及び校区小学校の英語教員や市教育委員会とさらに交流を深め、さまざまな情報を得られる関係の構築に努力した。

6) 2007 年度に続き、寝屋川市の英語教育支援者（JAT）選考会議に加えて、英語母語話者教員（NET）派遣会社選考会議にも委員として参加し、どのようなプロセスで選考がなされるのか確認した。

7) 早期英語教育の比較検討材料として、TESOL 国際会議に参加し、主に東南アジア各国の英語教員との交流・情報交換を行った。

8) 寝屋川市内の複数の小中学校で授業観察を実施した。

2008 度は研究 2 年目にあたり、継続的な研究調査が可能になるように、N 中学校の先生方との関係作りにさらに力を入れた。英語科の先生に、私の「英語授業研究」の講義を受講してもらったり、授業参観や指導、意見交換などを通じて、ただ単に研究のために協力校を利用するのではなく、相互に恩恵があるような形の研究体制の構築に向けて精力的に努力した。その結果、研究の意義が、一層理解され、手厚い協力体制ができたと考える。

2.4 2009 年度の研究のありかた

2009 年度の N 中生の小学校英語学習総時間数は上述の通り、中 3（35 時間から 70 時間に増）、中 2（70 時間）、中 1（90 時間：小 4 開始、20 時間プラス）であり、中 2 を除いて時間増になっている。

実施時期・方法に関しては、例年と同じく各学年の履修内容がほぼ完了する 3 学期末にした。

2009 年度の研究実施状況に関しては以下の通りである。

- 1) N中学校で1年生201名、2年生209名、3年生約223名の計633名を対象に、リスニング、リーディング、語彙・文法に関するテスト（JACEテスト）を2010年3月に実施した。
- 2) 同時に、2008年度改訂版の情意アンケート（計31問）を2010年3月に実施した。
- 3) スピーキングに関しては、インタビューテストをN中学校2年生1クラス（35名）を対象に2010年3月に実施した。
- 4) 特区5周年記念英語授業研究大会ブロック講師として、2中学、4小学校の公開授業（2009年11月）に向けて授業指導を引き受けた。主に授業中の生徒の様子をビデオに撮る授業観察法を解説し、「生徒の反応に学ぶ授業改善」に力を注いだ。
- 5) 2007年度-2008年度比較分析の概要を大学英語教育学会（JACET）、TESOL国際会議等で発表した。
- 6) N中学校、及び校区小学校の英語教員や市教育委員会とさらに交流を深め、さまざまな情報を得られる関係の構築に努力した。
- 7) 2008年度に続き、寝屋川市の英語教育支援者（JAT）選考会議や英語母語話者教員（NET：ALT）派遣会社選考会議に委員として参加し、どのようなプロセスで選考がなされるのか経験・観察した。
- 8) 例年通り、寝屋川市内の複数の小中学校で授業観察を実施した。

2009度は研究3年目にあたり、前半は2009年3月に実施したJACEテスト、インタビューテスト、情意アンケート結果を前年度分と比較する統計分析作業に多くの時間を費やした。

調査結果については、2011年に迫った小学校英語の完全導入を視野に入れた報告の準備を鋭意進めた。

さらに継続的な研究調査が可能になるように、N中学校の先生方はもちろんのこと、寝屋川市教育委員会との関係作りにさらに力を入れた。英語授業研究大会で公開授業を実施する英語科の先生の授業参観を行ったり、相互に恩恵があるような形の研究体制の構築に向けて精力的に努力した。また、学校訪問や情意アンケート結果を通じて、小中連携のあり方、「国際コミュニケーション」の概念の再構築等、問題点がいくつか示唆されたと言える。こうした知見を活かして更に充実した研究になるよう、最終年度報告を進めたいと考えた。

2.5 2010年度の研究のありかた

2010年度は研究4年目にあたり、前半は2010年3月に実施した3度目のJACEテスト、インタビューテスト、情意アンケート結果を前年度分、前々年度分と比較する統計分析作業に費やした。

研究実施方法については、もちろん2007年度、2008年度のものを継承したので割愛する。

その結果はN中学校へ報告すると共に、2011年に迫った小学校英語教育活動必修化への参考資料になるよう、大学英語教育学会、全国語学教育学会等、機会を得られるところでは発表を鋭意行った。得られたデータの比較結果を少しでも正確に解釈できるよう、生徒、教員インタビュー等の質的研究も試験的に開始した。また、校長が交代したN中学校の先生方はもちろんのこと、寝屋川市教育委員会との関係作りにさらに力を入れた。研究完成年度ではあるが、4度目のJACEテスト等の日程が平成23年度3月になるため、最終報告は平成23年度中を目指したい。

3. 2007-2009年度の研究調査分析結果について

3.1 2007-2009年度 研究調査の結果比較

2009年度JACEテストの結果から現在時点（2010年11月末）で明らかになっていることをまとめる。2007年度N中の学年ごとの小学校英語活動（以下「小英」と略記述）の履修時間数は、中3（12時間）、中2（35時間）、中1（70時間）であったが、2008年度は中3（35時間）、中2（70時間）、中1（70時間）に中3、中2で増え、2009年度は中3（70時間）、中2（70時間）、中1（90時間）と中3、中1で時間増である。

研究仮説としては、2008年度、2009年度生については、小学校での履修時間が増えていれば、英語スキルスコア、情意スコアが向上していると考えられる。総履修時間数が同じ場合は多少の学年差は生じて、統計的有意差までには至らないと考えた。

3.2 JACEテストによる語彙・文法、リーディング、リスニングテスト結果の比較

表9は中学1年生のJACEテスト結果（語彙・文法、リーディング、リスニング、各項目100点満点、合計300点満点）の2007年度分から2009年度分までのスコアとそれらを比較した結果である。

中1（表9： 2007：70時間 → 2008：70時間 → 2009：90時間）

（比較結果）

- ・語彙文法で2009年が2008年を若干上回る（ $d=.12$ ）。
- ・リーディングで2009年が2008年を若干上回る（ $d=.12$ ）、2007年を統計的有意に上回る（ $d=.28$ ）。
- ・リスニングで2009年が2008年、2007年を若干上回る（ $d=.08$ 、 $d=.10$ ）。

（ d =Cohen's effect size：効果量）⁶⁾

（考察）

2009年度生が語彙文法、リーディング、リスニングの全てのスコアで他年度を上回った。

表 9. 中 1 JACE 結果詳細 (年度別)

| | 年度 | 種別 | スコア 0 点の者を除いた平均・最高・最低値 | | | | 受験者数 |
|-----|------|-----|------------------------|--------|-------|--------|----------|
| | | | 語彙文法 | リーディング | リスニング | 合計 | |
| 中 1 | 2007 | 平均点 | 56.33 | 56.07 | 58.59 | 170.99 | 218 (－2) |
| | | 最高点 | 100 | 100 | 90 | 256 | |
| | | 最低点 | 25 | 11 | 36 | 81 | |
| | 2008 | 平均点 | 54.98 | 59.81 | 59.05 | 173.84 | 203 (－7) |
| | | 最高点 | 100 | 100 | 100 | 291 | |
| | | 最低点 | 9 | 11 | 31 | 84 | |
| | 2009 | 平均点 | 56.81 | 60.99 | 60.21 | 178.01 | 199 (－6) |
| | | 最高点 | 100 | 100 | 100 | 288 | |
| | | 最低点 | 10 | 11 | 26 | 78 | |

* 表中の受験者数内 () は無効になったデータ数

考えられる理由は以下の通りである。

- (1) 小英開始時期が 4 年生になり、総履修時間が 20 時間増えて 90 時間になったため。
- (2) 小学校卒業後 1 年しか経過しておらず、小英の経験がまだ効果的に働いているため。
- (3) 小中連携が以前よりスムーズになっており、中学校での学習に有機的に反映しているため。
- (4) 2009 年度生が基礎学力に優れた学年であるため。

また、リスニングにおいては、毎年スコアが上がっている。これは小学校英語活動の充実を物語る、疑いのない事実であろう。

中 2 (表 10: 35 時間 → 70 時間 → 70 時間)

表 10 は中学 2 年生の JACE テスト結果 (語彙・文法、リーディング、リスニング、各項目 100 点満点、合計 300 点満点) の 2007 年度分から 2009 年度分までの比較である。

(比較結果)

- ・語彙・文法で 2008 年が 2009 年、2007 年を上回る ($d=.12$ 、 $d=.11$)。
- ・リーディングで 2008 年が 2009 年と 2007 年を上回る ($d=.05$ 、 $d=.19$)。
- ・リスニングで 2008 年が 2009 年と 2007 年を上回る ($d=.18$ 、 $d=.19$)。
- ・スピーキング能力を調べるインタビューテストでは 2009 年生が 2008 年生、2008 年生が 2007 年生を統計的に有意に上回った (後述)。

(考察)

2008 年度生が 2009 年度生、2007 年度生より、全てのスキル分野で上回っている。こうした結果は、2008 年度生の基礎学力の高さと一見考えられる。しかし、この学年は表 9 の中 1 時点を注意深く見ると、他年度生に比べて得点が特に高いわけではない。中学校 1、2

表 10. 中 2 JACE 結果詳細 (年度別)

| | 年度 | 種別 | スコア 0 点の者を除いた平均・最高・最低値 | | | | 受験者数 |
|-----|------|-----|------------------------|--------|-------|--------|----------|
| | | | 語彙文法 | リーディング | リスニング | 合計 | |
| 中 2 | 2007 | 平均点 | 51.97 | 47.34 | 50.74 | 150.05 | 189 (－8) |
| | | 最高点 | 91 | 100 | 100 | 262 | |
| | | 最低点 | 18 | 11 | 19 | 54 | |
| | 2008 | 平均点 | 53.04 | 49.73 | 52.71 | 155.49 | 206 (－8) |
| | | 最高点 | 100 | 100 | 91 | 256 | |
| | | 最低点 | 18 | 11 | 19 | 75 | |
| | 2009 | 平均点 | 51.31 | 48.81 | 50.83 | 151.49 | 204 (－6) |
| | | 最高点 | 100 | 100 | 100 | 265 | |
| | | 最低点 | 15 | 9 | 16 | 57 | |

* 表中の受験者数内 () は無効になったデータ数

表 11. 中 3 JACE 結果詳細 (年度別)

| | 年度 | 種別 | スコア 0 点の者を除いた平均・最高・最低値 | | | | 受験者数 |
|-----|------|-----|------------------------|--------|-------|--------|----------|
| | | | 語彙文法 | リーディング | リスニング | 合計 | |
| 中 3 | 2007 | 平均点 | 66.32 | 70.86 | 69.84 | 207.02 | 225 (－4) |
| | | 最高点 | 100 | 100 | 100 | 300 | |
| | | 最低点 | 9 | 10 | 9 | 61 | |
| | 2008 | 平均点 | 63.01 | 67.01 | 68.96 | 198.97 | 202 (－1) |
| | | 最高点 | 100 | 100 | 100 | 300 | |
| | | 最低点 | 24 | 10 | 19 | 65 | |
| | 2009 | 平均点 | 65.02 | 68.05 | 71.18 | 204.58 | 222 (－3) |
| | | 最高点 | 100 | 100 | 100 | 300 | |
| | | 最低点 | 20 | 10 | 16 | 77 | |

* 表中の受験者数内 () は無効になったデータ数

年次の教科指導がスコアの伸びに影響を及ぼしている可能性が高い。小学校英語活動経験に起因すると思われる語彙・文法、読解に関する学力差があるとするならば、中学 2 年次終了時点ではすでに消失していることも示唆している。

中 3 (表 11: (12) 時間 → 35 時間 → 70 時間)

表 11 は中学 3 年生の JACE テスト結果 (語彙・文法、リーディング、リスニング、各項目 100 点満点、合計 300 点満点) の 2007 年度分から 2009 年度分までの比較である。

(比較結果)

- ・語彙文法で2007年が2008年、2009年を少し上回る ($d = .19$ 、 $d = .13$)。
- ・リーディングで2007年が2008年を統計的に有意に上回る ($d = .28$)、2009年を少し上回る ($d = .18$)。
- ・リスニングで2009年度生が2008年、2007年を少し上回る ($d = .18$ 、 $.15$)。

(考察)

全体的に2007年度中3生の基礎学力の高さが目立つが、リスニングだけは2009年度中3生が2007年度中3生を上回っている。中学校でリスニング能力を一層伸ばすような授業・取り組みがあったのかもしれない。この学年は中学校1年時(2007年度)、他年度に比べてリスニングのスコアは低かった。中学校に入ってから3年間の教科指導の影響が大きいと考えられる。

また小英授業がほとんどまだ実施されていなかった2007年度中3生の全体的なスコアが高いのは、担当教員が指摘するようにこの学年の基礎学力の高さである可能性が大きい。

3.3 中2インタビューテスト結果

(表12-13: 35時間 → 70時間 → 70時間)

表12、13は中学2年生1クラスのみを抽出して実施したインタビューテストの結果

表12. 会話 (Conversation)

| 中2一クラスのみ | 年度 | 種別 | 素点 | ラッシュ値 | 受験者数 |
|----------|------|------|-------|-------|------|
| | 2007 | 平均点 | 11.54 | .29 | 31 |
| | | 標準偏差 | 2.62 | 3.07 | |
| | 2008 | 平均点 | 13.55 | .49 | 35 |
| | | 標準偏差 | 1.65 | 1.98 | |
| | 2009 | 平均点 | 14.03 | .55 | 34 |
| | | 標準偏差 | 1.98 | 1.91 | |

表13. ストーリー・テリング (Story-telling)

| 中2 | 年度 | 種別 | 素点 | ラッシュ値 | 受験者数 |
|----|------|------|-------|-------|------|
| | 2007 | 平均点 | 7.57 | -.13 | 31 |
| | | 標準偏差 | 3.10 | 2.93 | |
| | 2008 | 平均点 | 11.39 | .01 | 35 |
| | | 標準偏差 | 3.03 | 2.73 | |
| | 2009 | 平均点 | 13.35 | .03 | 34 |
| | | 標準偏差 | 2.98 | 2.69 | |

(Conversation、Story-telling の 2 観点) の 2007 年度分から 2009 年度分までの比較である。全学年実施が望ましかったが、個別実施のため時間がかり、対象者を 2 年生の 1 クラスに限った (07 年度 31 名、08 年度 35 名、09 年度生 34 名)、クラス選択にあたっては JACE テスト平均点に最も近く、実施可能なクラスという条件で選んだ。各年度とも評価の事前のカリブレーションを念入りに行ったためか、3 名の評価者の間にほとんど差がなかった。また評点分布も正規性 (尖度、歪度) 等に問題がなかったため、そのため素点 (各項目 5 点満点) を利用し分析を行った。

(比較結果)

会話 : (Conversation)

2008 年が 2007 年を統計的有意に上回る ($d = .75$)

2009 年が 2008 年を統計的有意に上回る ($d = .22$)

ストーリー・テリング : (Story-telling)

2008 年が 2007 年を統計的有意に上回る ($d = .123$)

2009 年が 2008 年を統計的有意に上回る ($d = .80$)

(d = Cohen's effect size : 効果量)

(考察)

このような大きな統計的有意差で年次ごとにスコアが向上している事実が、中学 2 年生で発見されることは大変意義深い。「積極的に話す力」を育てることをカリキュラムの前面に出している寝屋川市の国際コミュニケーションの意図が生徒にスピーキング能力の「定着」というかたちで開花したものと考えてよからう。

課題としては、インタビューテストには協力校側の要望もあり、英検二次面接形式の「会話」項目と、絵を見せて自由にストーリーを英語で話させるタスクで、スピーキング力を測ることを目指した。参加生徒が緊張したり、ある程度前もって練習したりという可能性は完全にはぬぐいきれず、客観的な測定の難しさを感じた。さらに実施時間帯や教室環境も考慮に入れて結果を精査吟味しなければならない。一方でこのような研究には、クラスを担当する英語教諭による研究協力が大きな助力になることは言うまでもない。

3.4 情意アンケート結果の比較

以下の表 14 から表 16 は、中学 1 年生から 3 年生までの全員を対象に実施した情意アンケートの、2007 年度分から 2009 年度分までの各学年別の比較である。データ整理に際し、「3」の回答選択「どちらとも思わない」が多く見られたり、分布が歪んだり尖化している箇所が多く見られたため、素点データ (5 点満点) は補正して標準化したラッシュ値で表記してある。

表 14. 中 1 情意アンケート結果（年度別）

| 中 1 | 概念（質問項目数） | 年度 | 種別 | ラッシュ値 | 受験者数 |
|-----|--------------------------|------|------|-------|------|
| | F1：国際コミュニケーションに対する考え方（7） | 2007 | 平均点 | 49.16 | 209 |
| | | | 標準偏差 | 7.60 | |
| | | 2008 | 平均点 | 48.27 | 198 |
| | | | 標準偏差 | 9.20 | |
| | | 2009 | 平均点 | 48.64 | 199 |
| | | | 標準偏差 | 8.87 | |
| | F2：英語学習に対する考え方（5） | 2007 | 平均点 | 52.24 | 209 |
| | | | 標準偏差 | 8.39 | |
| | | 2008 | 平均点 | 50.11 | 198 |
| | | | 標準偏差 | 8.22 | |
| | | 2009 | 平均点 | 51.37 | 199 |
| | | | 標準偏差 | 8.43 | |
| | F3：自他に対する敬意（5） | 2007 | 平均点 | 43.98 | 209 |
| | | | 標準偏差 | 9.46 | |
| | | 2008 | 平均点 | 42.77 | 198 |
| | | | 標準偏差 | 10.51 | |
| | | 2009 | 平均点 | 43.74 | 199 |
| | | | 標準偏差 | 9.13 | |
| | F4：英語を学習する理由（4） | 2007 | 平均点 | 52.86 | 209 |
| | | | 標準偏差 | 6.35 | |
| | | 2008 | 平均点 | 52.44 | 198 |
| | | | 標準偏差 | 6.88 | |
| | | 2009 | 平均点 | 51.88 | 199 |
| | | | 標準偏差 | 7.24 | |
| | F5：外国語・外国文化に対する考え方（2） | 2007 | 平均点 | 47.26 | 209 |
| | | | 標準偏差 | 9.24 | |
| | | 2008 | 平均点 | 47.08 | 198 |
| | | | 標準偏差 | 9.79 | |
| | | 2009 | 平均点 | 47.99 | 199 |
| | | | 標準偏差 | 9.32 | |

表 15. 中 2 情意アンケート結果（年度別）

| 中 2 | 概念（質問項目数） | 年度 | 種別 | ラッシュ値 | 受験者数 |
|-----|--------------------------|------|------|-------|------|
| | | | | | |
| | F1：国際コミュニケーションに対する考え方（7） | 2007 | 平均点 | 49.16 | 209 |
| | | | 標準偏差 | 7.60 | |
| | | 2008 | 平均点 | 48.55 | 198 |
| | | | 標準偏差 | 8.23 | |
| | | 2009 | 平均点 | 48.88 | 199 |
| | | | 標準偏差 | 9.12 | |
| | F2：英語学習に対する考え方（5） | 2007 | 平均点 | 52.24 | 209 |
| | | | 標準偏差 | 8.39 | |
| | | 2008 | 平均点 | 50.11 | 198 |
| | | | 標準偏差 | 8.22 | |
| | | 2009 | 平均点 | 51.39 | 199 |
| | | | 標準偏差 | 7.89 | |
| | F3：自他に対する敬意（5） | 2007 | 平均点 | 42.16 | 209 |
| | | | 標準偏差 | 8.99 | |
| | | 2008 | 平均点 | 43.16 | 198 |
| | | | 標準偏差 | 9.56 | |
| | | 2009 | 平均点 | 44.18 | 199 |
| | | | 標準偏差 | 10.13 | |
| | F4：英語を学習する理由（4） | 2007 | 平均点 | 51.88 | 209 |
| | | | 標準偏差 | 6.75 | |
| | | 2008 | 平均点 | 52.66 | 198 |
| | | | 標準偏差 | 6.91 | |
| | | 2009 | 平均点 | 52.08 | 199 |
| | | | 標準偏差 | 7.19 | |
| | F5：外国語・外国文化に対する考え方（2） | 2007 | 平均点 | 48.13 | 209 |
| | | | 標準偏差 | 9.31 | |
| | | 2008 | 平均点 | 47.67 | 198 |
| | | | 標準偏差 | 9.43 | |
| | | 2009 | 平均点 | 48.72 | 199 |
| | | | 標準偏差 | 9.44 | |

表 16. 中 3 情意アンケート結果（年度別）

| 中 3 | 概念（質問項目数） | 年度 | 種別 | ラッシュ値 | 受験者数 |
|-----|--------------------------|------|------|-------|------|
| | | | | | |
| | F1：国際コミュニケーションに対する考え方（7） | 2007 | 平均点 | 48.86 | 209 |
| | | | 標準偏差 | 7.60 | |
| | | 2008 | 平均点 | 48.02 | 198 |
| | | | 標準偏差 | 9.46 | |
| | | 2009 | 平均点 | 49.16 | 199 |
| | | | 標準偏差 | 9.87 | |
| | F2：英語学習に対する考え方（5） | 2007 | 平均点 | 51.74 | 209 |
| | | | 標準偏差 | 8.67 | |
| | | 2008 | 平均点 | 51.31 | 198 |
| | | | 標準偏差 | 8.42 | |
| | | 2009 | 平均点 | 52.17 | 199 |
| | | | 標準偏差 | 8.82 | |
| | F3：自他に対する敬意（5） | 2007 | 平均点 | 42.14 | 209 |
| | | | 標準偏差 | 9.46 | |
| | | 2008 | 平均点 | 42.84 | 198 |
| | | | 標準偏差 | 9.39 | |
| | | 2009 | 平均点 | 43.77 | 199 |
| | | | 標準偏差 | 9.18 | |
| | F4：英語を学習する理由（4） | 2007 | 平均点 | 52.99 | 209 |
| | | | 標準偏差 | 7.35 | |
| | | 2008 | 平均点 | 52.87 | 198 |
| | | | 標準偏差 | 6.89 | |
| | | 2009 | 平均点 | 52.37 | 199 |
| | | | 標準偏差 | 7.16 | |
| | F5：外国語・外国文化に対する考え方（2） | 2007 | 平均点 | 48.12 | 209 |
| | | | 標準偏差 | 9.57 | |
| | | 2008 | 平均点 | 47.86 | 198 |
| | | | 標準偏差 | 9.16 | |
| | | 2009 | 平均点 | 48.36 | 199 |
| | | | 標準偏差 | 9.44 | |

標準化したラッシュ値比較（表 14-16）をみると、各学年とも F3：「自他に対する敬意」が基準値の 50 を各学年とも大きく下回っていることがわかる。つまり他の概念と比較して、回答スケール（1：強くそう思わない）から（5：強くそう思う）が相対的に低いことを表している。

F3 の質問項目は以下の 5 つである。「英語の学習」と「自他に対する敬意・尊重」との関係を問う質問項目の趣旨自体が、英語学習と直接には結びつきにくく、低スコアの一因かもしれない。

1. 英語を学習することによって、自分が周囲に認められていると思うようになった。
2. 英語を学習することによって、他人のよいところもわかるようになった。
3. 英語を学習することによって、自分のよいところもわかるようになった。
4. 英語を学習することによって、先生や他人の話も注意深く聞くようになった。
5. 英語を学習することによって、互いを尊重しあうようになった。

逆に F4：「英語を学習する理由」が各学年とも 50 を若干上回っている。F4 の質問項目は以下の通りである。質問の内容は「発信力」をうたう国際コミュニケーション科の授業目標内容を反映した、身近でわかりやすいものと思われる。

1. 英語を学習するのは、これからの国際社会で成功するため英語力がますます必要になると思うからだ。
2. 英語を学習するのは、英語ができるとよい印象を与えるからだ。
3. 英語を学習するのは、英会話をわかるようになりたいからだ。
4. 英語を学習するのは、将来の受験や就職に役立つからだ。

さらに F2 もほぼ 50 の標準値を各学年で維持している。これらの質問項目は以下の通りであり、教室内外で「国際コミュニケーション科」の授業による影響が定着しつつあることを表していると言えよう。

1. 授業以外でも、テレビ、映画、ネットなどで外国の文化に触れようとしている。
2. 英語以外の外国語も学習してみたいと思う。
3. 英語の学習や活動はたのしい。
4. 英語の学習をこれからも続けてゆきたい。
5. 英会話を聞いたり、英語を読んだりして英語力の向上をいつも心がけている。

最も質問項目数の多い F1（7 質問項目）は 50 の標準値に毎年ほぼ近いスコアであった。これらの質問項目は以下の通りである。「国際コミュニケーション科」の目標や理念を含んだものが多いが、生徒にとってはやや英語学習からは遠く、抽象的な質問であったかもしれない。

1. 英語の学習を通じて、日本や日本文化について興味を持つようになった。
2. 英語の学習を通じて、外国や外国文化について興味を持つようになった。
3. 英語の学習を通じて、もっと外国人と身近に暮らしたいと思うようになった。
4. 英語の学習を通じて、外国人の考え方や外国文化を理解することが必要だと思った。
5. 英語の学習を通じて、日本人や日本文化についてもっと外国人に伝える必要があると思った。
6. 英語の学習を通じて、外国人ともっとコミュニケーションをとりたいと思うようになった。
7. 英語の学習を通じて、人生の視野が広がったと思う。

次に各学年別の結果と考察をまとめる。

中1

（結果と考察）

F2：「英語学習に対する考え方」（5 項目）で 2008 年度生は 2007 年度生を統計的に有意に下回った：ラッシュ値比較 2007（ $M=52.24$ $SD=8.39$ ）、2008（ $M=50.11$ $SD=8.22$ ）； $t(405)=2.59$ 、 $p=.01$ 、 $d=.26$ （小）。他の 4 概念においても 2008 年度生は 2007 年度生を全て少しずつ下回った。英語スキルでは、スピーキング、リスニングなど、向上している項目もあるので、当然情意スコアの向上が予想されたにもかかわらず、2009 年度生、2008 年度生が表 14 にある F5 をのぞくほぼすべての情意概念スコアに於いて 2007 年度生を下回ったことは意外であった。

中2

（結果と考察）

各要因の比較で統計的に有意差は一切検出できなかった。F2 で 2007 年度生の高さが目立ったが、あとはほとんど各年度間に変化がない。毎年のスコアがこのように一定しているのは興味深いことである。「国際コミュニケーション」や「外国語」についてアンケートで聞いていても、生徒の通常の中学校の英語授業を連想させるためであろうか、目立つような影響を示唆する結果は出てこない。

中3

(結果と考察)

各要因の比較で統計的有意差は一切検出できなかった。2年生と同じく、各年度の回答スコアはほぼ一定している。

これら全ての結果が、果たして Rasch Model を利用して回答を標準化したために差が出にくかったのであるとすれば、情意とスキルの関係についてこれまで行われてきた素点による回答スコア比較とは全く別の結果を残したと言える。

中学校2、3年生になり、学校に慣れ、担当教員や教え方にも慣れてくると、このよに年度間の差がない結果はむしろ当然かもしれない。もしも有意差が検出されるようなことがあればそれは小学校英語教育活動が量・質共に大きく変化したか、中学校の担当教員、指導方法が、該当年次に大きく変化するような理由があったと考えられる。

4. これまでの研究の概括

2009 度は研究3年目にあたり、2010 年3月に実施した 2009 学年度分 JACE テスト、インタビューテスト、情意アンケート結果を前年度分、前々年度分と比較統計分析した。現時点で明らかなことをまとめる。各年度の小学校英語活動の開始学年と総履修時間は表 17 の通りである。

表 17. 各年度の小英開始学年と総履修時間数

| | 2007 年 | 2008 年 | 2009 年 |
|----------|-----------|-----------|-----------|
| 中学校 1 年生 | 小 5・70 時間 | 小 5・70 時間 | 小 4・90 時間 |
| 中学校 2 年生 | 小 6・35 時間 | 小 5・70 時間 | 小 5・70 時間 |
| 中学校 3 年生 | なし | 小 6・35 時間 | 小 5・70 時間 |

(1) 英語スキル 1 年生に関しては語彙・文法、リーディング、リスニングの3項目で2009 年度の中1生が3項目全てで2007 年度生、2008 年度生を上回った。これらを説明する理由の可能性として以下が挙げられる。

- ・小英開始時期が4年生になり、総履修時間が20時間増えて90時間になったため。
- ・卒業後1年しか経過しておらず、小英の経験がまだ効果的に働いているため。
- ・小中連携が以前よりスムーズになっており、うまく中学校英語に適応している。
- ・2009 年度生が基礎学力に優れた学年であるため。

(2) リスニングのスコアは各学年の学力差があるにもかかわらず、中学校1年生では毎年向上していることは注目に値する。

(3) 2年生はJACEテストに関して小英70時間履修の2009年度生、2008年度生がそろそろ35時間履修の2007年度生を上回った。小英による効果は少なくとも語彙・文法、リーディング、リスニングでは見えにくい。

(4) 一方で、中2の1クラスのみを対象に実施したスピーキングテストでは、2009年度生が2008年度生を、2008年度生が2007年度生を有意なスコア差で上回った。積極的に「話す」ことは、元来、寝屋川市の国際コミュニケーション科のカリキュラムの大目標であるので、これが達成され、年々その効果があがってきていることの証であろう。(2)の1年生のリスニングのスコアの年次ごとの向上と共に、寝屋川市の小学校英語活動の大きな成果である。

(5) 3年生はリスニングを除く全てで、小学校英語活動が一番少ない(0-12時間)2007年度生が、他年度を凌いだ。N中の教員が言うように、2007年度生が抜群に学力が高かったことを示唆するものであろう。また、この時点(卒業後3年経過)ではもはや小学校英語活動の長期的効果を検証するのは困難である。

(6) 情意アンケートに関しては、中1が「英語学習に対する考え方」(5項目)で2008年度生は2007年度生を統計的に有意に下回った。中2、中3では両学年とも5要因23項目で2009年度生、2008年度生、2007年度生間で有意差はなかった。前述のように年次ごとに数値が大きく変動することの方が、問題があるのではないかと今回の調査から示唆を得た。

5. まとめ

今回の中間報告では、中学1年における全体的なスコアアップ、特にリスニングスコア、中学2年におけるスピーキングスコアの3年連続の伸長が確認された。すなわち小学校英語活動が、中学校2年生頃まで生徒のスピーキングスコア、中学1年生頃までのリスニングスコアに何らかの効果を及ぼしていると考えてよからう。また、年次ごとの得点の増加は、開始学年の早期化(小4)や総指導時間数の増加(20時間)ではなく、むしろ小中連携の充実を意味するものと解釈することもできる。一方、小学校英語活動で扱わない語彙・文法力、リーディング力に関しては長期的な効果は認めにくい。また情意面に於ける年次ごとの変化もほとんど検出できなかった。

今回の途中報告で明らかになったこのような小学校英語活動のリスニング面、スピーキング面への長期的効果がどのような性質のものであるかは、最終年度へ向けての研究継続とともに、他のテストやアンケート結果を可能であれば入手し、比較をすることにより新たな示唆が得られると考える。

6. 今後の予定

- (1) 結果をより深く解釈できるように、児童・生徒や先生方にインタビューを実施し、質的研究の視点を是非加えたい。また可能であれば児童・生徒の書いたものや、授業で創作したもの、ノートなども参考資料として利用したい。
- (2) 授業観察もさらに小中双方で行いたい。「国際コミュニケーション科」授業を小学校で実際体験した中学生の感想も集めたい。
- (3) 2010 年度中 1 生は小学校 3 年開始であり、総時間数もさらに 20 時間増加し 110 時間になる。こうした変化が与える影響をできるだけ適切に測りたい。

(本研究は科研費基盤研究 (C) 課題番号: 19520530 研究課題名: 「小学校における英語教育活動の長期的な効果」の中間報告である)

注

- 1) 寝屋川市では ALT: Assistant Language Teacher のことをこう呼び慣わしている。
- 2) クロンバック α (Cronbach's coefficient alpha) はテストの信頼性 (内容的妥当性・一貫性) を調べるために使われる。 α 値は通常 (0.7~0.8) 以上を満たすべきであるとされている。
- 3) 本研究で使用したラッシュ分析のソフトは Winstep3.63 及び Facet3.62 である。ラッシュ分析法は本文中で簡単に触れているが、アンケート回答やインタビュー評価で得られた順位尺度による回答を対数化して推定値 (logits と呼ばれる) である間隔尺度の単位で表す。これにより統計比較の下準備のデータ整理を容易にするだけでなく、アンケートの肯定と否定の中間レベルの選択肢が必ずしも中間的反応を表していないことが判明したり、質問項目の妥当性等が検証でき、データの整合性の修正も可能である。
- 4) 統計的視点から見た得点分布の歪み。平均値プラス標準偏差が「取り得る」最高点を超えるような得点分布をいう。本研究ではみられなかったが、逆の場合を「床効果」(floor effect) という。
- 5) F5 は質問項目が 2 個のみで、対象数が少ない場合は信頼性に欠けるためこの分析 (2.2.2) には含まなかった。
- 6) Cohen's d は二つの母集団の平均値の差に関する効果量を表す。Field (2005) では効果サイズに関して 0.2 以上を small effect、0.5 以上を medium effect、0.8 以上を large effect としている。 d 値と p 値の関係は、例えば表 12、13 の分析を例に取ると具体的には次のようになる。

Conversation

2007 ($M=11.54$ $SD=2.62$)、2008 ($M=13.55$ $SD=2.65$) ; $t(64)=-3.79$, $p=.000$, $d=.75$ (close to large effect size)

2008 ($M=13.55$ $SD=2.65$) ; 2009 ($M=14.03$ $SD=1.65$) $t(67)=-.89$, $p=.03$, $d=.22$ (small effect size)

Story-telling

2007 ($M = 7.57$ $SD = 3.10$)、2008 ($M = 11.39$ $SD = 3.03$; $t(64) = -5.06$ 、 $p = .000$ 、 $d = 1.23$ (large effect size)

2008 ($M = 11.39$ $SD = 3.03$; 2009 ($M = 13.35$ $SD = 2.98$) $t(67) = -3.91$ 、 $p = .000$ 、 $d = .80$ (large effect size)

参考文献

- ELPA (Association for English Language Proficiency Assessment; 英語運用能力評価協会) HP <http://english-assessment.org/products/test/jace.html> Retrieved 2009/09/10
- Field, A. (2005). "Discovering Statistics Using SPSS." Sage
- Uematsu, S. (2009), "Reviewing the Research Investigation the Subsequent Effect of English Learning at Elementary Schools in Japan." *SJEE (Setsunan Journal of English Education)*, Vol. 3, pp. 51–72.
- Uematsu, S. (2010), "The Effects of English Learning in Elementary Schools on Students' English Language Skills and Their Affective Variables in Junior High Schools." *Jacet Journal*, Vol. 50, pp. 49–62.
- 植松茂男 (2008) 「台湾の小学校英語教育の現状と課題」 *SJEE (Setsunan Journal of English Education)* Vol. 2, pp. 167–183.